

## 「デミアン I」

——シンクレールの自我実現——

高 橋 陽 一

(帯広畜産大学独文学研究室)

1978年8月31日受理

### 「Demian I」

— Die Selbstverwirklichung der Hauptperson Sinclair —

Von

Youichi TAKAHASHI

「デミアン」はヘッセにとって危機の時代に成立した作品であり、ヘッセに大きな転機をもたらしたものと見える。この作品は自我と正面から取り組み、以前からヘッセを悩まし続けてきた固定観念の原因となるものをつきとめ、それを自我に統合するという、極めて厳しく、困難な問題を取扱っているが、もしヘッセが精神分析に興味をもたなかったら、この作品は成立しなかったであろうし、「デミアン」以後の作品も大きく変わっていたであろう。

当時のヘッセの心境は、「自伝素描」の中に描かれている通りであり<sup>1)</sup>、この作品は精神分析の体験の結果、成立したものと言えよう。

ヘッセに大きな転機をもたらした「デミアン」を五つに分けて考察することにする。まずこの小論「デミアン I」においては、成立当時の事情、主人公シンクレールの自立心の芽生え、二つの絵の三点について考察し、「デミアン II」においてここで保留した、デミアンなる人物、終わりの始まりの二点を取り上げることにする。

#### I

さてヘッセが精神分析へ興味をもった直接の動機は、第1次世界大戦が彼に与えた衝撃と、身边に起こった度重なる不幸であり、まず最初にこの二点に関する当時の実情を簡単に振り返ってみる必要がある。

1914年7月に第1次世界大戦が勃発し、その二カ月後にヘッセは「新チューリッヒ新聞」に「オオ友よ、その調子をやめよ、」という有名な短文を発表した。この短文はドイツ国民の中でも、特に冷静に大戦を受けとめているはずの、芸術家や学者に訴えたものであるが、ドイ

テーマで繰り返されている、元型 (Urbild der Mutter)<sup>10)</sup> への一種の固定観念であり、それについてはヘッセ論 I, II で述べた通りである。しかし「デミアン」においては郷愁というテーマだけにとどまってははいない。恐らくラングとの六十回におよぶ対話により、コンプレックスを克服し、長年の課題であった自己実現をいかに追求するか学んだものと思われる。

## II

この小説は序文と八つの章から成っている。最初の四章《二つの世界》、《カイン》、《罪人》、《ペアトリーチェ》は「デミアン」以前の作品にみられるように、少年時代の物語りから始まり、主人公シンクレールの自立心の芽生えを中心として描かれている。そこで四章まで、ファーベルにできるだけそって二、三の点について述べてみたい。

第一章《二つの世界》においては、この題が示す通り、明暗二つの世界におけるポラリテートの問題が取り扱われている。しかしこの問題はヘッセの作品において決して新しいものではなく、初期の作品においても、美しい自然と不幸な主人公とが背中あわせに描かれていた。特に「車輪の下」における、上品な明るい“ゲルバー小路”と下品な暗い“タカ小路”が描かれていたし、ガイエンホーフエン時代に書かれた「ゲルトルート」においても、音楽のもつ美しさと音楽のもつ魔力とが、主要人物のゲルトルートとムオトの中に描かれていた。しかし「デミアン」においてはこの問題を取り上げ諦念の美をうたいあげるだけにとどまらず、主人公の明暗二つの世界における葛藤を通し、自己実現へ結びつけていく点が大きく変化したところであろう。

さてシンクレールは第一の明るい世界に属していたが、この世には明暗二つの世界があり、それがどんなに近く隣り合っているか知っていた。ところがシンクレールの安定した生活をくつがえし、彼をノイローゼにしてしまうような事件が起こる。シンクレールがリンゴを盗んだという作り話をしたために、クローマーに二マルク強要されるという事件である。ここで一番重要と思える個所は、シンクレールがクローマーの強迫に奮えながら帰宅した時、何も知らない父は靴がぬれていることで小言を言うが、この瞬間シンクレールは父に対し軽蔑と優越感を抱く点である。

Es war mir lieb, daß mein Vater sich, als ich eintrat, über meine nassen Schuhe aufhielt. Es lenkte ab, er bemerkte das Schlimmere nicht, und ich durfte einen Vorwurf ertragen, den ich heimlich mit auf das andere bezog. Dabei funkelte ein sonderbar neues Gefühl in mir auf, ein böses und schneidendes Gefühl voll Widerhaken: ich fühlte mich meinem Vater überlegen! Ich fühlte, einen Augenblick lang, eine gewisse Verachtung für seine Unwissenheit, sein Schelten über die nassen Stiefel schien mir kleinlich<sup>11)</sup>.

Von dieseem ganzen Erlebnis, soweit es bis hier erzählt ist, war dieser Augen-

blick das Wichtige und Bleibende. Es war ein erster Riß in die Heiligkeit des Vaters, es war ein erster Schnitt in die Pfeiler, auf denen mein Kinderleben geruht hatte, und die jeder Mensch, ehe er er selbst werden kann, zerstört haben muß. Aus diesen Erlebnissen, die niemand sieht, besteht die innere, wesentliche Linie unsres Schicksals. Solch ein Schnitt und Riß wächst wieder zu, er wird verheilt und vergessen, in der geheimsten Kammer aber lebt und blutet er weiter<sup>12)</sup>.

たしかにこの体験は、明るい父の世界に対し投げかけられた最初の疑問ではあるが、シンクレールの自己実現における出発点とするにはまだ早過ぎるようである。事実すぐ後に「私自身すぐに新たな感情に恐れをなし、さっそく父の足にキスをしあやまりたかった<sup>13)</sup>。」と書いているし、父の明るい世界に安住したいという願望は、その晩の夢となって現れているからである。

Er war dicht bei mir, bis ich einschlief, dann aber träumte ich nicht von ihm und nicht von heute, sondern mir träumte, wir führen in einem Boot, die Eltern und Schwestern und ich, und es umgab uns lauter Friede und Glanz eines Ferientages<sup>14)</sup>.

第一章では一種の精神錯乱の状態、明暗二つの世界の間で幽霊のようにびくびくと日を送る主人公が描かれているが、二章に入るとデミアンから聖書のカインとアベルの話しに対する全く別な解釈の仕方があることを知らされる。シンクレールは一時はこの新しい解釈に混乱するが、次第に父の世界に疑問を感じた時、自分自身がデミアンの言う意味でのカインであることに気付く。

Ja da hatte ich selber, der ich Kain war und das Zeichen trug, mir eingebildet, dies Zeichen sei keine Schande, es sei eine Auszeichnung und ich stehe durch meine Bosheit und mein Unglück höher als mein Vater, höher als die Guten und Frommen<sup>15)</sup>.

このことからデミアンの新しい解釈は、混乱するシンクレールに対し一つの方向性を与えるものと考えられる。デミアンについては後述するが、二章以後主人公シンクレールに対し常に指導的存在として、よりよきものへの修正された姿として描かれている<sup>16)</sup>。

さてデミアンの教示により刺激されたシンクレールの自立への無意識なる願望は、夢の中で父殺害へと発展する。この夢は父を凌駕しようとする願望の現れであり、それがかなえられない現実のシンクレールに対し無意識からの対照的な、しかし合目的補償作用の役目を果たしていることを見逃してはいけなからう<sup>17)</sup>。そしてデミアンの新しい解釈と、父殺害の夢はシンクレールが無意識に懐いていた自立心の意識化を促す大きな力を持っている。次の文からもここではじめて自己実現のための出発点に立ったことがわかる。

Ich kam mit diesen Gedanken zu keinem Ende. Es war ein Stein in den Brunnen gefallen, und der Brunnen war meine junge Seele. Und für eine lange, sehr lange Zeit war diese Sache mit Kain, dem Totschlag und dem Zeichen der Punkt, bei dem meine Versuche zu Erkenntnis, Zweifel und Kritik alle ihren Ausgang nahmen<sup>19)</sup>.

ここで不良少年クローマーについて触れてみたい。まずシンクレールとクローマーの出会いについてであるが、不思議なことになぜシンクレールが初めて会ったクローマーにあのように気に入られようと嘘までついたのだろうか。またニマルク強要された時もそうである。「いま大声で激しく叫んだら、上から誰かがさっそくかけつけてくれるだろうか、と私は考えた。しかし私はそれを断念した<sup>19)</sup>。」という。クローマーに対する恐れからだろうか、単なる偶然からだろうか。ところでクローマーに出会う以前のシンクレールは、暗い世界への興味が抑圧された状態であったにせよ、安定した生活を送っていた。しかしこの生活もいずれは覆されねばならないことを彼自身願っていたと考えられる。

Ich lebte sogar zuzeiten am allerliebsten in der verbotenen Welt, und oft war die Heimkehr ins Helle — so notwendig und so gut sie sein mochte — fast wie enine Rückkehr ins weniger Schöne, ins Langweiligere und Ödere.

Da war stets die Heimkehr zum Vater und zum Guten so erlösend und großartig, ich empfand durchaus, daß dies allein das Richtige, Gute und Wünschenswerte sei, und dennoch war der Teil der Geschichte, der unter den Bösen und Verlorenen spielte, weitaus der lockendere, und wenn man es hätte sagen und gestehen dürfen, war es eigentlich manchmal geradezu schade, daß der Verlorene Buße tat und wieder gefunden wurde<sup>20)</sup>.

このことからシンクレール自身の中に、クローマーを必要とする何かがあったと考えられよう。シンクレール自身第五章で次のように言っている。「あるものを是非必要とする人が、この必要なものを見出したとすれば、それを彼に与えるのは偶然ではなくて、彼自身の願望、必然が彼を導くものである<sup>21)</sup>。」したがってシンクレールがクローマーに近づき、嘘をついて事件に巻き込まれたのも、彼自身の内界と外界の呼応性によるものであり、この事件そのものが、彼の自我の成長のための内的必然性による、みごとな布置がなされていると言えよう。ところでクローマーは、狡猾さと破壊性をそなえた不良少年であり、シンクレールが不満を懐きながらも安住せねばならなかった父の世界から、彼を引きずり出し、父母の手のとどかない世界へ連れ去り、結果的には彼の自立への手助けをしたことになる。つまりシンクレールにとって彼は自立へ導くという善なる一面と、強要されたニマルクを支払うためにシンクレールに二重の罪をしいる悪の一面、また父の世界を打ち壊す破壊性と、新しき世界へ導くという創造性という相反する二つの要素をそなえたトリックスター的な存在と言えよう。

さて先にデミアンという不思議な少年の出現により、クローマー事件が解決され、シンクレールが自立への出発点に立ったところまでみてきたが、三章に入ってもまだ指導者としてのデミアンを不必要とするほど彼は成長していない。

Mein Bewußtsein lebte im Heimischen und Erlaubten, mein Bewußtsein leugnete die empordämmernde neue Welt<sup>23)</sup>.

この章での問題となるものは、「許された明るい世界ではもぐり込んで隠れていなければならない、一つの根本本能<sup>23)</sup>」が、つまり二章ではクローマーだったものが、こんどは彼自身の中から生じ彼を悩ますようになることである。ここでも不思議なことに、一年以上も話してもしたことのないデミアンが現れ、二章におけるカインとアベルの話に対する新しい解釈と全く同じように、二人罪人の話について新しい解釈をしてみせる。この二章と三章におけるデミアンの新しい二つの解釈は、共にシンクレールが固守しなければならないと思っていた、父の明るい世界で育まれてきた観念をくつがえそうとするものである。さらにデミアンは性の問題と宗教のあり方について次のような意見を述べる。

Und das wird nun alles einfach dem Teufel zugeschrieben, und dieser ganze Teil der Welt, diese ganze Hälfte wird unterschlagen und totgeschwiegen. Gerade wie sie Gott als Vater alles Lebens rühmen, aber das ganze Geschlechtsleben, auf dem das Leben doch beruht, einfach totschweigen und womöglich für Teufelszeug und sündlich erklären! Ich habe nichts dagegen, daß man diesen Gott Jehova verehrt, nicht das mindeste. Aber ich meine, wir sollen Alles verehren und heilig halten, die ganze Welt, nicht bloß diese künstlich abgetrennte, offizielle Hälfte! Also müssen wir dann neben dem Gottesdienst auch einen Teufelsdienst haben. Das fände ich richtig Oder aber, man müßte sich einen Gott schaffen, der auch den Teufel in sich einschließt, und vor dem man nicht die Augen zudrücken muß, wenn die natürlichsten Dinge von der Welt geschehen<sup>24)</sup>.

》カイン《の章におけるデミアンの助言は、シンクレールを自立への出発点に立たせたが》罪人《の章では、二人の罪人の話と宗教批判を通し、デミアンが理想とし、シンクレールも憧れる明暗の二つの世界を包含した、新しき神の存在を知らせると同時に「自分の道を見いだすことは自分自身のなすべきことである。」ことに「自分の問題はすべての人間の問題であり、すべての生活と思索の問題である<sup>25)</sup>。」という悟りにシンクレールを導いている。

その後、シンクレールはデミアンと別れ、高等中学へ進むが、寄宿舎での孤独な生活は彼を甚しく墮落させてしまう。しかしこの》ベアトリーチェ《の章に入るとそれ以前の三章とは異なり、シンクレールが何か困難な問題に直面してもデミアンはなぜか姿を見せない。このシンクレールの荒れようは、クローマーと性の問題という恐るべき脅威からやっとのことで逃れ、再び明るい、穏やかな、しかし少々退屈な世界に迎えられた者の感じる、一種の喪失感と

いう逆説を含んだものとも考えられるが、デミアンのいない生活そのものが、自立するための試練の場として与えられていると考えた方がよさそうである。なぜならデミアンは彼が一人で立ち直れると確信したうえで姿を見せていないようである。

Ja, Max sagte zu mir: Jetzt hat Sinclair das Schwerste vor sich. Er macht noch einmal einen Versuch, sich in die Gemeinschaft zu flüchten, er ist sogar ein Wirtshausbruder geworden; aber es wird ihm nicht gelingen. Sein Zeichen ist verhüllt, aber es brennt ihn heimlich. — War es nicht so?<sup>23)</sup>

### III

さて四章までファベルにそって、シンクレールの成長をみてきた。次にそれに続く四章については、シンクレールの描く奇妙な絵、デミアンなる人物、終りの始まりの三点について考察するが、この小論では奇妙な絵について取り上げることにする。

この奇妙な数枚の絵は、シンクレール自身がベアトリーチェと名付けた、一人の少女がきっかけとなり描かれる。

Die Geschlechtlichkeit, unter der ich litt und vor der ich immer und immer auf der Flucht war, sollte nun in diesem heiligen Feuer zu Geist und Andacht verklärt werden. Es durfte nichts Finsteres mehr, nichts Häßliches geben, keine durchstöhnten Nächte, kein Herzklopfen vor unzüchtigen Bildern, kein Lauschen an verbotenen Pforten, keine Lüsternheit. Statt alles dessen richtete ich meinen Altar ein, mit dem Bilde Beatricens, und indem ich mich ihr weihte, weihte ich mich dem Geist und den Göttern. Den Lebensanteil, den ich den finsternen Mächten entzog, brachte ich den lichten zum Opfer. Nicht Lust war mein Ziel, sondern Reinheit, nicht Glück, sondern Schönheit und Geistigkeit<sup>27)</sup>.

この文章から、シンクレールの性の衝動が変容され、人格化されたものであり、その投影を受けるにふさわしい姿としてベアトリーチェが描かれていることがわかる。そしてシンクレールは自分の持っているイギリスのベアトリーチェの絵があ少女に十分似ていないという理由で彼女を描こうとするが、時折り往来で会う彼女の顔を思い浮かべようとすればするほど、うまくいかない。ついにベアトリーチェの顔を描くことを放棄し、空想と筆の運びに従って、一つの絵が描かれる。そしてでき上がったものは夢想された顔となる。それは彼女の顔ではなく、ある別な、非現実的な、少女の顔というよりは少年のそれであり、神秘的な生命に満ちていた<sup>28)</sup>。そしてその絵から次のような印象を受けている。

Als ich vor dem fertigen Blatte saß, machte es mir einen seltsamen Eindruck. Es schien mir eine Art von Götterbild oder heiliger Maske zu sein, halb männlich, halb weiblich, ohne Alter, ebenso willensstark wie träumerisch, ebenso starr wie

heimlich lebendig. Eies Gesicht hatte mir etwas zu sagen, es gehörte zu mir, es stellte Forderungen an mich. Und es hatte Ähnlichkeit mit irgend jemand, ich wußte nicht mit wem<sup>89)</sup>.

次にシンクレールはこの同じ章で奇妙なもう一枚の絵を描いている。それはかつてデミアンより指摘されていた、父の家のあの紋章の絵である。

Nun war es ein Raubvogel, mit einem scharfen, kühlen Sperberkopf. Er stak mit halbem Leibe in einer dunkeln Weltkugel, aus der er sich wie aus einem riesigen Ei heraufarbeitete, auf einem blauen Himmelsgrunde. Wie ich das Blatt länger betrachtete, schien es mir mehr und mehr, als sei es das farbige Wappen, wie es in meinem Traum vorgekommen war<sup>90)</sup>.

さてこの二つの絵に共通するものは、シンクレールの意識が低下した状態で描かれている点である。第一のペアトリーチェに始まる絵においては、「ただ空想と、かき始められたものや絵具や絵筆から自然に生じ」「夢みる絵筆で」「戯れの手さぐりと無意識なものの中から生じた」ものであり「ついにある日はほとんど無意識に」描かれたものである。そしてこの最初の絵が描かれたころシンクレールは以前もそうであったように頻りに夢を見はじめようになる。

Gerade in jener Zeit fing ich wieder an, viel zu träumen, wie ich es als Kind stets getan hatte. Mir schien, ich habe jahrelang keine Träume mehr gehabt. Jetzt kamen sie wieder, eine ganz neue Art von Bildern, und oft und oft tauchte das gemalte Bildnis darin auf, lebend und redend, mir befreundet oder feindlich, manchmal bis zur Fratze verzogen und manchmal unendlich schön, harmonisch und edel<sup>91)</sup>.

またそれは第二の紋章の絵の描かれる前夜にも共通している。シンクレールは次のような夢を見ている。

In der Nacht träumte ich von Demian und von dem Wappen. Es verwandelte sich beständig, Demian hielt es in Händen, oft war es klein und grau, oft mächtig groß und vielfarbig, aber er erklärte mir, daß es doch immer ein und dasselbe sei. Zuletzt aber nötigte er mich, das Wappen zu essen. Als ich es geschluckt hatte, spürte ich mit ungeheurem Erschrecken, daß der verschlungene Wappenvogel in mir lebendig sei, mich ausfülle und von immem zu verzehren beginne. Voller Todesangst fuhr ich auf und erwachte<sup>92)</sup>.

このように非常に暗示的な夢の後に、二枚目の絵が描かれるのであるが、その前後には、“Traum”, “bewußtlos”, “Phantasie”, „träumerisch”, “träumhaft”等の言葉が頻りに使用されているし、それにシンクレール自身「全く非現実的な世界に住んでいた<sup>93)</sup>。」とさえ言っ

いる。このことはこの絵が彼によりつくり上げられたものではなく、彼自身の中から湧き出てきたもの、本来彼自身の中に存在していた一つの像であったと考えられよう。そして明らかに、この二枚の絵が、シンクレール自身の無意識の世界から送られてくる、一種のメッセージ<sup>38)</sup>であることを意味するものであろう。

さてこの二枚の絵が無意識からのメッセージだとすると、その意味するものは一体何であろうか。まず最初の絵についてであるが、この絵は頻りに夢となって現れ、その度ごとに描きなおされていくうちに、しだいに意識化されていくのであり、ある朝シンクレールはその絵に対し次のような感じを受ける。

Und eines Morgens, als ich aus solchen Träumen erwachte, erkannte ich es plötzlich. Es sah mich so fabelhaft wohlbekannt an, es schien meinen Namen zu rufen. Es schien mich zu kennen, wie eine Mutter, schien mir seit allen Zeiten zugewandt<sup>39)</sup>.

そしてしばらくすると、この絵の意味するものがしだいに明瞭なものとなり、次のようなかなりはっきりとした解釈を下している。

Lange saß ich ihm gegenüber, auch als es schon erloschen war. Und allmählich kam mir ein Gefühl, daß das nicht Beatrice und nicht Demian sei, sondern ich selbst. Das Bild glich mir nicht-das sollte es auch nicht, fühlte ich aber es war das, was mein Leben ausmachte, es war mein Inneres, mein Schicksal oder mein Dämon. So würde mein Freund aussehen, wenn ich je wieder einen fände. So würde meine Geliebte aussehen, wenn ich je eine bekäme. So würde mein Leben und so mein Tod sein, dies war der Klang und Rhythmus meines Schicksals<sup>39)</sup>.

ベアトリーチェという少女に始まり、最初は「神々の像」「神聖な面」「半ば男性で、半ば女性」のような絵ができ上がった。そしてそれは「母のように私を知っている」ものとなり、「昔から私の方を向いている」かのような感じを受け、ついにはその絵が「自分自身の姿」ではないかという感じさえ受けるようになる。だがシンクレールは、その絵が「自分には似ていない。似るはずがない。」と思いつつも、それは「私の生命」「心」「運命」そして「聖霊」であるという感じを捨て切ることができない。自分自身の姿にしてはあまりに奇妙な像であり、シンクレールは戸惑いを感じている。そしてまだこの絵に現れているものが、彼自身の中で抑圧されてきた、もう一人の自己の姿であることには気付いていない。

ここでこの絵の意味するものが何であるか、論を進める前に第二の絵について触れる必要がある。というのもこの二枚の絵はしだいにつながりを持つようになるからである。

この絵は半身を暗い地球の中に入れ、その中からさながら大きな卵から出ようとするハイタカの絵であるが、これはデミアンとの会話により刺激されたシンクレールが、見た夢に始まる。夢の中でハイタカはシンクレールの体の中で活動し始め、体中にひろがり、内から食いへ

らしていくという<sup>36)</sup>、非常に暗示的なもので、それに彼は驚きと恐怖を感じる。理解に苦しむシンクレールは「夢幻的な予感に促されて<sup>37)</sup>」、つまり彼自身の内面の声に従って、住所も確かでないデミアンに、差し出し人の名前も書かずその絵を発送すると不思議なことに、デミアンからそれに対する次のような返事が届く<sup>38)</sup>。

「鳥は卵の中からぬけ出ようと戦う。卵は世界だ。生まれようと欲するものは、一つの世界を破壊しなければならない。鳥は神に向かって飛ぶ。神の名はアブラクサスという<sup>39)</sup>。」

明らかに鳥はシンクレール自身の内部に抑圧されてきたものを意味し、卵は明るい一面のみ強調されているがゆえに、シンクレールが不満を懐いていた世界であろう。そしてこの手紙の言わんとするところは、既成道徳を捨て、新しき神を求めんことをシンクレールに要求しているかのようなのである。シンクレールは第一のベアトリーチェに始まった絵が、彼自身の内部に抑圧されたもう一人の自分であることに気づいてはいるが、この第二の絵に対するデミアンからの解答を受けとることにより、これらの二枚の絵に一つのつながりを感じはじめる<sup>40)</sup>。第一の絵を彼自身の内部からの暗示であり、デミアンによる解答を外部分からの暗示ではないかと考えはじめる。そしてデミアンによる「アブラクサスの神」の存在を知らされ、より具体的な方向性を与えられたシンクレールは、前章までと同じように頻りと夢を見はじめる。

Ich träumte wieder heftig, und zwar mehr am Tage als in der Nacht. Vorstellungen, Bilder oder Wünsche, stiegen in mir auf und zogen mich von der äußeren Welt hinweg, so daß ich mit diesen Bildern in mir, mit diesen Träumen oder Schatten, wirklicher und lebhafter Umgang hatte und lebte, als mit meiner wirklichen Umgebung<sup>41)</sup>.

引用文にみられるように、夢遊病者のように、ほとんど一日中夢の世界の中で、そこに現れる幻と共に生活し、一定の夢を繰り返し繰り返し見ているうちに、一つの夢像がかなりはっきりとしたものとして知覚されてくる。そしてこの夢像は先の第一の暗示と第二の暗示とが結合されたものとなって現れる。

前章においては「神々の像」「半ば男性、半ば女性」「母のような」という表現がなされているが、この章では「天使と悪魔」「男と女を一身に兼ねそなえたもの」「人と獣」「最高の善と極悪」という病的なものを感じさせる表現に変わる。そしてさらに次のように変わっていく。

Das Bild der Traumgeliebten sah ich oft mit überlebendiger Deutlichkeit vor mir, viel deutlicher als meine eigene Hand, sprach mit ihm, weinte vor ihm, fluchte ihm. Ich nannte es Mutter und kniete vor ihm in Tränen, ich nannte es Geliebte und ahnte seinen reifen, alles erfüllenden Kuß, ich nannte es Teufel und Hure, Vampyr und Mörder. Es verlockte mich zu zartesten Liebesträumen und zu

wüsten Schamlosigkeit, nichts war ihm zu gut und köstlich, nichts zu schlecht und niedrig<sup>42)</sup>.

ここでは次第に夢像に対する輪郭は明瞭なものとなり、「母」「愛人」「悪魔の娼婦」「吸血鬼」「人殺し」と呼んでいる。さてこれらの表現が、ユングの主張する、母親元型の諸相と一致するものであることは言うまでもないが、その中でも小児性恐怖症の患者に見られる神話的な形象と酷似している<sup>43)</sup>。先にヘッセ論 I・II においてヘッセの出生と成長の環境について述べたが、その中でヘッセにはフロイト理論の傑作である、エディプスコンプレックスが発生する素地があったこと、そしてそれは郷愁というテーマで繰返し初期の作品に描かれていたこと、またヘッセは九歳年上の、ヘッセの生母を思わせるマリア・ベルヌイと結婚し、その結婚生活が破局へと向かっていることなどを指摘した。そして「デミアン」成立当時のノイローゼがこのことに起因しているとするならば、上記の夢像に対する異常な表現が、小児性恐怖症に由来する母親元型の現れであると考えられよう。さてシンクレールは、最初の絵の意味するものが何であるか完全に理解していなかった。そして二枚の絵につながるのを感じ始めているもののまだ確信をもっていない。ここでラングを思わせるピストリウスが現れ、シンクレールに、二枚の絵の持つ意味を理解させることになる。

まず最初にピストリウスの言葉を二、三引用してみよう。

“Es ist ein großer Unterschied, ob Sie bloß die Welt in sich tragen, oder ob Sie das auch wissen! Ein Wahnsinniger kann Gedanken hervorbringen, die an Plato erinnern, und ein kleiner frommer Schulknabe in einem Herrnhuter Institut denkt tiefe mythologische Zusammenhänge schöpferisch nach, die bei den Gnostikern oder bei Zoroaster vorkommen. Aber er weiß nichts davon! Er ist ein Baum oder Stein, bestenfalls ein Tier, solange er es nicht weiß. Dann aber, wenn der erste Funke dieser Erkenntnis dämmert, dann wird er Mensch. Sie werden doch wohl nicht alle die Zweibeiner, die da auf der Straße laufen, für Menschen halten, bloß weil sie aufrecht gehen und ihre Jungen neun Monate tragen. Sie sehen doch, wie viele von ihnen Fische oder Schafe, Würmer oder Egel sind, wie viele Ameisen, wie viele Bienen! Nun, in jedem von ihnen sind die Möglichkeiten zum Menschen da, aber erst, indem er sie ahnt, indem er sie teilweise sogar bewußt machen lernt, gehören diese Möglichkeiten ihm”<sup>44)</sup>.

“Die Dinge, die wir sehen”, sagte Pistorius leise, “sind dieselben Dinge, die in uns sind. Es gibt keine Wirklichkeit als die, die wir in uns haben. Darum leben die meisten Menschen so unwirklich, weil sie die Bilder außerhalb für das Wirkliche halten und ihre eigene Welt in sich gar nicht zu Worte kommen lassen<sup>45)</sup>.”

シンクレールが悩まされてきた明暗二つの世界は、いい換えれば彼の心の二重性によるもので

あり、意識と無意識との対立であった。そして彼は、無意識内から生じ、彼を悩まし続けてきたもの、つまり動物的な衝動に対し、禁じられたものとし、恐れをいただき、抑圧してきた。そんなシンクレールに対し、ピストリウスは「ぼくたちの内なる魂が欲することは何一つ恐れてはならないし、禁じられていると思っはいけない<sup>40)</sup>。」ことを教え、さらに上記引用文からもわかるように、無意識内より生ずる、さまざまな衝動から決して逃れることなしに、その現実性を認め、それと共に生きること、つまり自我に統合することにより自己実現がかなえられると教えている。そして内なる魂の欲するものを、意識化することを繰り返し、自我に統合することにより無意識内にある大きな普遍の力を制御するすべを手に入れることができることも教えている。その結果シンクレールは次の引用文に見られるような悟りに到する。

Nirgends so einfach und leicht wie bei dieser Übung machen wir die Entdeckung, wie sehr wir Schöpfer sind, wie sehr unsere Seele immerzu teilhat an der beständigen Erschaffung der Welt. Vielmehr ist es dieselbe unteilbare Gottheit, die in uns und die in der Natur tätig ist, und wenn die äußere Welt unterginge, so wäre eines von uns fähig, sie wieder aufzubauen, denn Berg und Strom, Baum und Blatt, Wurzel und Blüte, alles Gebildete in der Natur liegt in uns vorgebildet, stammt aus der Seele, deren Wesen Ewigkeit ist, deren Wesen wir nicht kennen, das sich uns aber zumeist als Liebeskraft und Schöpferkraft zu fühlen gibt<sup>41)</sup>.

このことから、ピストリウスは、シンクレールの内部から湧き上がった一つの暗示、つまりベアトリーチェに始まる奇妙な絵と、既成道徳の殻を打ち破り、内面の声に忠実であるというデミアンからの暗示と受け取れる手紙を、一つのつながりのあるものとして理解させたと言えよう。ところでピストリウスにより夢像が本来何に由来するものか、またその夢像は抑圧すべきものでないことを学んだ後、シンクレールは、先のベアトリーチェに始まった絵と同じような絵を描いている。つまりこれは夢像が何度となく現れ、知覚され何度となく手直しされてきたものの最後と見るであろう。彼は「夢想的な短時間を幾度となく利用してほとんど無意識に」描いた絵を「母」「愛人」「売女姪婦」「アブラクサス」と呼ぶ。ここで注意しなければならないのは、描かれた絵の前でシンクレールが次のように感ずることである。

Das gemalte Gesicht im Lampenschein verwandelte sich bei jeder Anrufung. Es wurde hell und leuchtend, wurde schwarz und finster schloß fahle Lider über erstorbenen Augen, öffnete sie wieder und blitzte glühende Blicke, es war Frau, war Mann, war Mädchen, war ein kleines Kind, ein Tier, verschwamm zum Fleck, wurde wieder groß und klar. Am Ende schloß ich, einem starken, inneren Ruf folgend, die Augen und sah nun das Bild inwendig in mir, stärker und mächtiger. Ich wollte vor ihm niederknien, aber es war so sehr in mir innen, daß ich es nicht mehr von mir trennen konnte als wäre es zu lauter Ich geworden<sup>42)</sup>.

ここに言う“内部の姿”とはシンクレールの無意識内にあった、抑圧されてきた自己の姿を意味するものである。そしてそれが意識内の自我に統合されて、つまりコンプレックスが解消していく様子がうかがえよう。また上の引用文中、人称代名詞 Ich の頭文字が大文字で書かれているのは、恐らく意識内にあるシンクレールの自我という意味ではなくして、無意識をも含めた、彼の心全体の中心である自己という意味がそこに含まれていると考えられる<sup>49)</sup>。そしてこのことはシンクレールが「めざめた人間」になったこと、つまり彼の内部に自己が誕生したことを意味するものであろうし、この最後の絵を、夢の中ででき事かどうか確かではないにしろ、手のひらで焼いて食べてしまうという奇妙な行為も同じことを意味するものと考えられる。さらにシンクレールがコンプレックスを解消したであろうことは、そのすぐ後、彼がエヴァ夫人に会い、彼女の中に自分が悩まされてきた夢像と同じものを見た時、あの異常な表現は消え失せていることからわかる。そこでは「魔精と同時に母」「運命と同時に愛人」という穏やかな表現に変わっている<sup>50)</sup>。

ヘッセが異常なまでの母への思いに悩まされてきたこと、それゆえ、母と生き写しのマリアと結婚したことなど「ヘッセ論 I・II」において取り上げたが、「デミアン」成立の直後に、この二人は離婚している。ラングによる60回に及ぶ治療は、恐らくヘッセ自身のコンプレックスを解消させたのであり、それゆえ、妻への思いも色褪せたものになったと推測できるのではないだろうか。

なお、この作品には、不可思議な人物デミアン、そしてヨーロッパ批判等、まだ数多くの問題が含まれているが、それらは次回「デミアン II」において取り上げることにする。

## 文 献

- Hermann Hesse, Gesammelte Schriften III, IV Suhrkamp Verlag 1968 (=G. S. III, IV).  
 Hugo Ball, Hermann Hesse, Sein Leben und sein Werk. Suhrkamp Verlag (=H. Ball).  
 ヘッセ研究, 秋山六郎兵衛, 三笠書房 (=秋山).  
 ヘッセ研究, 高橋健二, 新潮社 (=高橋).  
 ユング心理学入門, フリーダ・フォーダム, 国文社 (=フォーダム).  
 無意識の心理, C. G. ユング, 人文書院 (=ユング).  
 ユング心理学, J. ヤコビー, 日本教文社 (=ヤコビー).  
 コンプレックス, 河合隼雄, 岩波新書 (=河合).  
 エピステメーテ, 朝日出版, 1977. 5.

## 注

1) G. S. IV. S. 478.

Diesmal aber blieb mir die Einkehr nicht erspart. Es dauerte nicht lange, so sah ich mich genötigt, die Schuld an meinen Leiden nicht außer mir, sondern in mir selbst zu suchen. Denn das ich wohl ein: der ganzen Welt Wahnsinn und Roheit vorzuwerfen, dazu hatte kein Mensch und kein Gott ein Recht, ich am wenigsten. Es mußte also in mir selbst allerlei Unordnung sein, wenn ich so mit dem ganzen Weltlauf in Konflikt kam. Und siehe, es war in der Tat

eine große Unordnung da. Es war kein Vergnügen, diese Unordnung in mir selber anzupacken und ihre Ordnung zu versuchen.

- 2) ヘッセ研究 (高橋) S. 121.
- 3) Ball S. 133.
- 4) Ball S. 135; 秋山 S. 96; 高橋 S. 125-126.
- 5) Ball S. 141.
- 6) 河合 S. 67.
- 7) Ball S. 141.
- 8) Ball S. 143-144.
- 9) G. S. III S. 199.
- 10) Ball S. 138.
- 11) G. S. III S. 114-115.
- 12) G. S. III S. 115.
- 13) G. S. III S. 115.
- 14) G. S. III S. 117.
- 15) G. S. III S. 127.
- 16) デミアンは非常に不思議な、非現実的な存在として描かれている。作品全体を通してても本当に実在した人物なのか疑わしい。Ball はデミアンを Traum-Ich と呼んでいる。(Ball, S. 64) 恐らくシンクレールにとっての“可能性としての自我”, もしくは“こうありたいという願望としての自我”と解釈すべきであろう。このようにデミアンをシンクレールの分身と考えると、彼の非現実的な存在も理解できよう。なおこのことについては「デミアン II」にて論ずるつもりである。
- 17) 「心的エネルギー論」p. 157, ユング全集 8 巻 p. 227, ヤコビー p. 145.  
「意識的な態度が一面的であればあるほど、そしてそれが生の可能性の最善の状態から遠く離れていればいるほど、極めて対照的な、しかし合目的補償性をそなえた活発な夢が、個体の心理的自己操縦の表現として登場してくる可能性は、それだけ一層大きい。」
- 18) G. S. III S. 128.
- 19) G. S. III S. 109.
- 20) G. S. III S. 105.
- 21) G. S. III S. 191.
- 22) G. S. III S. 143.
- 23) G. S. III S. 143.
- 24) G. S. III S. 156.
- 25) G. S. III S. 157.
- 26) G. S. III S. 233.
- 27) G. S. III S. 174-175.
- 28) G. S. III S. 176.
- 29) G. S. III S. 176.
- 30) G. S. III S. 183.
- 31) G. S. III S. 177.
- 32) G. S. III S. 182.
- 33) G. S. III S. 184.
- 34) G. S. III S. 177.
- 35) G. S. III S. 178.
- 36) G. S. III S. 182.
- 37) G. S. III S. 183.
- 38) G. S. III S. 184.
- 39) G. S. III S. 185.

- 40) G. S. III S. 188.
- 41) G. S. III S. 188.
- 42) G. S. III S. 190.
- 43) エピステメーテ, 1977. 5. ユング; 母親元型の心理学的諸相, S. 37.  
小児性恐怖症の場合, 母親は, 動物, 魔女, 幽霊, 人喰い女, 雌雄同体者その他これに類するものとして現れてくる。
- 44) G. S. III S. 199.
- 45) G. S. III S. 296.
- 46) G. S. III S. 205.
- 47) G. S. III S. 198.
- 48) G. S. III S. 211-212.
- 49) 河合; S. 66.
- 50) G. S. III S. 224.